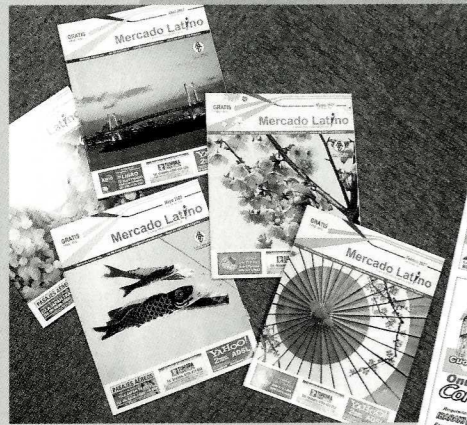


編集長・社長のロベルト・アルバさん。
来日して18年になる

アルバさん一家。
休日は、できるだけ家族と一緒に過ごす



社員の山田めぐみさん。
修士論文で『メルカード・ラティノ』を
取り上げたのが縁



毎月の表紙を、季節を感じさせる
日本の自然や行事の写真が飾る



掲載された広告。「持ち家の夢」を
日本でかなえるようになった

外国人 として 生きる

在日南米人のドラマを載せて

古屋 哲 (ふるや さとる)
大谷大学講師

「工場」の夢をかなえる

「日本に来たばかりのころ、自動車部品工場で働いていた。ラインに向かつて同じ作業を繰り返していると、いろんなことを考えてしまう。誰もが夢を見る。ほくには何ができるだろう。この国で何かするのは、難しい。でも、本気でやればできるはずだ」。

一九九四年にロベルト・アルバさんがはじめたのは、無料配布の広告掲載誌『メルカード・ラティノ』。そのころ目にした英語誌が、ヒントになった。日本語を知らず、情報がない在日南米人たちには、そうしたメディアが必要だ。

はじめは街のコピー機や市民団体の簡易印刷機を使い、紙を折ってホットキスで留めた。今では、A四版変形、一六四ページ上質紙フルカラー印刷、部数二万、毎月第一土曜日発行の堂々たる雑誌。発行主体は、「有限会社メルカードラティノ」、社長のロベルトさんほか、ペルー二人と日本人一人の社員をかかえる。フリーランサーの記者やデザイナーは一人。

表紙を開けると、全面から八分のページまで、大小の広告が並ぶ。が、意外と読み物の記事が多い。英BBCやEFE通信社の記事や、在日南米人、老若男女の人物紹介だ。

在日南米人の世界、 日本語の社会

大阪市北区に事務所があるが、配布先は在日南米人が多い東海地方から北関東にまで広がっている。はじめは、南米食材店やレストランを一軒ずつ訪ねて、雑誌を置いてもらった。「空いた貸店舗や自宅を店にするから、見つけにくいところにある。店構えは小綺麗でもおしゃれでもない。看板が無造作に出ていて、扉を開けるとラテン音楽が大きな音で鳴っている。店員はメニューをもってくるのが遅く、注文すると食べきれないほどの量が出てくる」ような店がねらいどころ。まちがいにく経営者もお客も南米人だ。

掲載される広告にも、そうしたレストランやディスコ、食材通信販売がある。航空券と本国への宅配便、求人広告や入管手続代行は、いかにも移民らしい。化粧品、服飾、美容室は女性が対象。広告の新しい傾向は、建て売り住宅と、インターネットテレビだという。住宅販売が目立つのは日本の金融会社が外国人にもローンを組むようになったからだ。不安定な彼らの雇用を考えるとすこし心配。

読み物もだいたい、南米人たちは「どれほど日本的になっても、いつでも自分たちのことばで読みたいんだ」。通信社の記事は、ロベルトさんが選ぶ。文化記事

が好みだけど、あきないいろいろな混せる。人物紹介は、協力記者のアントニオ・カルテナスさんが取材して書く。日本の弱小児童サッカークラブを「優勝ラッシュ」に導いたトレーナー。工場で南米人労働者を人間あつかいしない課長の通訳をした音楽家の体験談。幼くして両親を亡くして畑仕事に明け暮れ、今は毎年いくつものマラソン大会を完走し「運動靴を脱ぐ日はこない。死ぬときは走りながらだ」とうそぶく六四歳。大阪の工場で突然、人には見えないものが見えることに気がついて、幻想画の画家になった男性。

読者からの便りに、くこの母親に送った、という人もいた。きつと雑誌をめくりながら「息子はこんな顔を見てるのねえ」とつぶやくのだろうな、とロベルトさんを喜ばせる。

こうした在日南米人の世界を支えるためにも、日本社会との折衝が必要になる。ロベルトさんは、工場で労災に遭って一カ月休み、そのときから日本語の勉強をはじめた。それでできることがぐっと広がった。そのころ住んでいた大阪市東成区には、小さな印刷所がたくさんある。そこで仕事を受けてもらえるか尋ねてまわった。どこでもよい返事をもらったが、結局きめたのは、中堅企業である大阪書籍の印刷部だった。

娘たちに贈りたいもの

「ペルーのような低開発国にはチャンスがないが、ここにはある。広告を載せる人たちはみんな、何か違うこと」をした。工場労働という運命づけられた境遇から、抜け出したいんだ。美容の宣伝をしている人は、弁当製造工場で働いていたかもしれない。でも本国では美容を勉強して、あるときわたしも何かやってみよう、と決心したんだ。そういう瞬間が、好きなんだ。小さな広告にも、ひとつひとつにドラマがある。前向きに生きていくっていう物語がね」。

ロベルトさんには、日本人の奥さんとのあいだに一〇歳、七歳、五歳の三人の娘がいる。父親として娘たちに贈りたいのは教育だ。でも、とくにペルーについて学んでほしいとは、考えないという。

その代わりに、ロベルトさんは、自分の子どもたちのことを話して聞かせることがある。「街のパン屋さんにその日のパンを買いに行くのは子どもの役目だった。で、起きたらすぐに行く。学校の友だち、おばさんたち、ちょっと気になるあの子。みんなが店を列を作っている。毎朝の小さな冒険。そんな話をしてやると、娘たちも喜んで、ペルーに行きたいって言うんだよ」。